

二年目

二月

○日

一寮の工事が二週間の予定のところ、追加工事があり、二週間の延期となる。気苦
勞（！）と睡眠不足がたまり、疲労困ぱい。

はじめから四週間と言ってくれませんか。覚悟が違うし、二週間用のスタミナ配分
だったから困るのデス。もうあとのことは考えられず、一日ずつぎりぎりのところで
持ちこたえている状態。工事、早く終れ。

○日

C子が結婚する。勤めは辞めないとのことだけれど、もちろん寮は出ることになる。
正直言って私はその日を待っていた。C子は規則違反の常習者で、いくら注意しても
平気で破り、もう頭にきていたからだ。

こんなに凶太い神経の持ち主も珍しい。ハンコ押して、と来たから「結婚するそうだけど大丈夫かな。規則破つてばかりで。世間はここのように甘くはないよ」と言つてやった。そうしたら涼しい声で「大丈夫ですよ」

ということとは、これからちゃんと言いますよということか、破つても暮らせるわということか。多分あとの方だろう。C子がそんなに急に変わるはずがないもの。こういうのが、お行儀の悪い子供を叱りもしない母親になるのだ。それを阻止できない悔いは残るが、これでお荷物は一つ減つた。

○日

夜、H子が電話で「外泊するつもりだったけどやめて十一時発の電車で帰りますが、入れてもらえるでしょうか」と言つてきた。「何を言つてるの、入れるに決まつてるじゃないの。気をつけて帰りなさいよ」と返事をする。

しかし、予定の時間を過ぎてても帰らない。十一時に乗つたのに途中でトラブルにあつたか、また気が変つたのか。寮生達も心配して下りて来た。T子が見て来る、と自転車にとび乗つた。十二時を過ぎて、見に行く方も危ないからやめなさいと言つたのに、聞かないで行つてしまった。その直後H子から電話がかかり、石橋の駅にいるとのこ

と。

やがてT子と二人で帰って来て、やれやれであった。私が「乗る、と言った電車に乗りなさい。乗らなかつたら連絡しなさいよ」と言ったら、H子はすみませんと言いながら泣いている。どうやら道々、T子にこっぴどくおこられたらしい。そのあと、同僚のT子、A子、同室のO子が揃って「監督が行き届かずご迷惑をかけました。これから気をつけますから」と丁寧なごあいさつ。こんな言葉を聞くとは思わなかった。真夜中のお風呂に入り、寝る。

○日

寮内はバレンタインデー一色に明け暮れる。恋人のいる子はセーターを編み、恋人のいない子も、お目当ての男性にチョコレートあげるらしい。大っぴらに「どんなん買ったん？」と見せ合つて、当節の若いモンは、からつとしている。

私はオイラニハカンケイナイ、と思つていたが、ひよんなことから関係ができた。U子が「おばさん、チョコレートあげる、好きなの取つて」とどつさり持つて来た。

聞けば、U子の彼氏が八人の女の子からチョコレートをもらつたそうで、U子が、そんなに沢山もらったのなら私のはいらんね、とむくれたら、彼氏は交換してくれ、

と言ったので、自分のを渡して八人分全部取ってきてやったの、ということであった。

そして「これとこれはギリ（義理）チョコ、これはあやしい、心がこもってる」などと言いながら選り分けている。「あーあ、その心がこんな所でさまよっているなんて、かわいそうねえ」私はほんとに同情して、それでも色とりどりのかわいいチョコレートをいくつかもらった。

しかしこのいわくのあるチョコレート、どんな味がすることやら。

○日

A子の、彼にプレゼントするチョコキができ上がった。これははじめ、去年のクリスマス・プレゼントのセーターになるはずであった。それが急病で入院したため、バレンタインデーに、と目標が変わった。そして一月中頃、半身を編んだところで、大き過ぎるかなあ、と私の所へ相談にやって来た。大き過ぎるかなあどころではない。

「お相撲さんが着られそうねえ、ほどいて編み直した方がいいわ」「えーっ、こんな沢山編んだのに」「何でもっと早く気がつかなかったのよ。ほどくのは勇気がいって、ずるずると編んでしまいがちだけど」（これはいつも私が経験していることだ）それでゲージを取り直して編み直し。

しかし、バレンタインデーが近づいても、身頃が編めていない。その上、毛糸が少し足りないようだ。「もうあきらめてチョッキにしたら？」それでもA子は、セーターにする、と言っていたのだが、同じ毛糸が売り切れで、やむなく袖なしにせざるを得なくなつた。が、それもバレンタインデーには間に合わず。

編み直しのところで、マフラーにするように言ったらよかつた。それなら完成しただろうから。

それにつけても、私がチョッキと言う度に、A子におこられる。「おばさん、ベストと言つて」

三月

○日

今夜は、新入生を迎える前に先輩教育をやるう、と新旧寮長が言い出して、新規則を加え、規則再確認の寮会。

連絡しないで門限を破ったら、罰として掃除、十時半を過ぎて帰るのが三回たまつたらトイレ掃除、外泊は月四回まで、というのが加わる。十時半を過ぎて、というのは、十一時を過ぎたらお風呂洗いの罰があるけれど、十時五十九分に何回帰っても何もなし、というのは不公平ではないか、と私が提案した。

寮生達は「ひえー」と不満声を発したが、罰の前に、女の子が帰る時間としては十時が限度、というのがあからすよ。掃除がいやなら早く帰りなさい。

その他、物の使い方、後始末の仕方、ゴミの出し方に至るまでこまごまと説明。(こまでせんらんか)

何か言いたいことないか、の新寮長I子の問いかげに、O子が「寮母さんはもっと怒っていいと思う」と言った。怒れば後味が悪いし、ついのみこむくせがついていたが、最近、あまりの不愉快さに堪忍袋の緒が切れて、一人の寮生を叱ったところだった。でもその子は改まり、あとはからつとしていいるから、やはり言うべきであると思っていたので「これから怒ります」と答える。

散会のあとI子が、夜騒いだら電源を切る手があるのを教えてくれた。彼女は寮に三年住んでいる。前の寮母さんによく電源を切られたとのこと。

○日

薔薇の花束をもらった。思いを花に託した男性からではなく、荷物を運んで来た新入生に。「えっ下さるの、わあうれしいなあ、やあきれいやねえ」しばしうっとりとする。二十本余りの薔薇は、カスミ草に囲まれて、やさしい朱色をしていた。適当な花瓶がないので、ゴミ籠の底に水の入ったどんぶりを置き、ぼさっと投げ入れる。ベリーグッド。

夜は寮会。みんなが集まったところを見計らって、薔薇を持ちこむ。「わあすごい」「きれいでしょ」「どうしたの?」「もらった」「え?」「もらったのよ、私でもお花を

くれる人もいるんです」「きゃあ」

きゃあ、ということとは、私の言い方で誤解したのでしょ、しめしめ、させておきましよう。五十を過ぎたって、男から花はもらいたいんだもの。

○日

Y子が帰って、また痴漢がいる、と言いに来た。もう、この寒いのにご苦労さん。懐中電灯を持って見に行くと、自転車に乗った三人の少年がいた。ついむかつとして「何か用！」と怒鳴ったら、一人が「犬が中にいるのですけど」と言う。でも疑わしかった。そんなこと言うて中をのぞこうという魂胆か。「犬なんか入れるようになつていませんよ」それでも「庭の方から入りました」と。私は「そうお？」と半信半疑となる。

そこへ彼の言うことを証明する犬がやって来た。人間ほどの大きな犬。ア、ごめん、疑つて。

「中へ入って捕まえてもいいですか」少年は断つて入り、犬を抱いて出て行った。ほんとに悪かった。この頃、男を見れば痴漢と思う癖がついて。その上、今までの本痴漢には「何かご用ですか」と丁寧な声をかけていたのに今夜に限って怒鳴つたのだ。

Y子に言う。「ぬれぎぬやったよ、あの人達」Y子も「悪いことしたなあ、私も門を入る時、痴漢、と聞こえるように言うてしようた」

少年達の気持ちは傷ついたに違いない。ごめんなさい。

○日

新入生入寮。今年は岐阜、宮津、江津（島根）、指宿、津名（兵庫）と小豆島の出身、大卒二、高卒四、の六人。

夕食はお赤飯とブリの照り焼き、炊き合わせなど二十七人なので、Rさんに応援をたのんだ。「口は動かさず、手を動かそう」をモットーに、でもやはり少しは口も動かして楽しくこしらえた。Rさんは娘のAちゃんと買い物に行く予定を変更してくださったのだ。Aちゃんごめんね。

総務のK氏が来られて新入生に訓話。私と、寮則を説明するためにI子が同席する。それぞれ自己紹介をした時、私が「ドジな寮母ですが……」と言ったところ、K氏が「ドジで分かりますか？」と口を挟んだ。私が謙遜して言っているのを、これでは念押しになるではないか。ほんとはそんなにドジばかりやってるわけではないのですけどねえ。

○日

朝氣持ちよくピアノ・ソナタを聴いていたら電話のベルが鳴った。しもた、給食センターからだ。二日後の食数を知らさなければならぬのに、勘定をしていない。鳴っている電話機を横目に食堂へ走りこみ、欠食のサイン数を数える。七人。二十三人から七人引いたらなんぼや。ベルの音を数えながら、走りながらとはいえ、すぐ出てこない。どうなってるの？ こんなことってあるの？ 自分の頭がおそろしくなった。モウロクしたとしてもミヤサン、一年生のサンスウではありませんか。

○日

夜遅く、新入生の母親から「娘が痴漢にあった、大阪は怖いと泣いて帰りがついている。お父さんも心配のあまり寝こんだ」との電話。鹿兒島弁の上、興奮しておられるから、はつきりと聞き分けられなかつたけれど、どうやら右の趣旨の繰り返しで、私の「明日から先輩をボディガードとしてついて行かせます」と言うのも聞こえないようであった。

本人に聞いてみると、地下鉄の梅田、淀屋橋間で男に触られたとのこと。そして「も

う明日から行きたくない、鹿児島で就職する、就職するなら早い方がいいし、お父さんも帰って来いと言うからすぐ帰る」と言う。

同室のJ子は「痴漢がいやなのは分かるけど、みんなそれぞれの方法でたたかっている、そんなことで辞めるのはもったいないから思い直すように」と説得を続けた。しかし、もう行かないと言うばかりなので、私はK氏と相談をした。

翌朝J子が「あの子が帰りたいのは痴漢のためではない、お父さんが恋しいからということが判った」と言う。K氏が近郊にいる兄、叔母に連絡を取り、来てもらって改めて事情を聞き、言い分を聞いたところでも、やはりホームシックの重症ということに落ち着いた。

お兄さんは「あの子は末っ子で、十歳まで母親と寝ていたが、親も帰って来いというのはけしからん」と怒っておられた。しかし、誰がどう言おうと彼女の帰りたい気持ちには変らず、二日間研修に通っただけで、退職と決まった。

折角大阪へ働きに来たのに、すぐ帰りたくなるのは意志が弱過ぎる、とも言えるけれど、彼女の様子を見ていたら弱いどころか、出身校、会社、先輩への迷惑などみんな押し退けて、ただ「帰る」のを押し通したのは強い、としか言いようがない。

親離れができなかった、ということでもあるけれど、あとで判ったことは、父親が、

彼女と別れた日から寝こんだとのことで、それを電話で知らせて来たりして、子離れのできていない父親が原因とも言える。しかし、それなら初めから遠くへ手放さなければいいのではないか。手放したのなら、子のことを思つて淋しいのは辛抱するべきだし、私は初めはかわいそうと思つていたのだけれど、だんだん腹が立つてきた。

それじゃ荷物をまとめましょうと言つと、もうしてある、とのこと。一同無言で、荷物をお兄さんの車に押しこんだ。

彼女の帰つたあと、部屋、郵便受け、靴箱の名札がみんな抜いてあり、彼女がいた、という痕跡は何もなかった。

○日

門限破りに罰がついたら、みんなの帰りが早くなつたこと、あきれるほどである。罰がなけりや守れない、のは悲しくもあるけれど、門限を守れ、と言いつつたり、まだか、とイライラしなくてもよくなつて、気は楽になつた。

靴箱の上に靴を置かないようにといくら言つてもきかないので「これからは靴箱の上にあるものは捨てますよ」と言い渡した。でもみんなは「そう言つてもおばさん、捨てへんよきつと」となめているだろう。

しかし、もう甘くないよ。誰か置いたら即、捨てることにする。

○日

給食センターには四、五人の栄養士がいて、週毎に二人ずつ交替でメニューを作っている。好みが出るのか、仕入れの関係か、揚げ物が続いたり、煮物が続いたりする。キャベツを刻みだしたら毎日刻む。キャベツは葉をはがさずに数個のブロックに分けて、刻んでから洗い、その時に芯の部分をより出すという方法。

自分の刻んだキャベツの山を眺め、時々買って食べるお弁当の中のキャベツと比べ、私の方が細かい、などと他愛のないことであつたが、その弁当屋さんが店を閉じた。私に負けたからかも知れない。

○日

新入生のC子は、水泳の平泳ぎでモントリオールでのオリンピックに出たそうである。

新人紹介の寮会で「水泳をやったから、膝から下がO脚です」と笑わせていたが、そんなすごいものとは知らなかった。「どうして言わなかったのよ」と言えば「行っ

ただけですから」と笑っている。

肩幅は少し広いけれど、小柄な細い体で、とてもそんなふうには見えない。大卒なのに高卒よりも幼い感じの可愛らしい子である。

そのC子とI子が揃って真夜中に帰り、二日続けての罰のお風呂掃除をやった。C子はそれを会社に行つてしゃべったらしく、I子が怒っている「そんなことをうれしそうに言うもんじゃないよ」C子は「それでも、面白かったもん」

C子は寮生活は初めてで、何でも面白いらしい。電話で延々と、こうやってああやって、と誰かに報告している。もちろんここでも、門限破つて罰の掃除をした、とうれしそうに言っているのに違いない。

○日

鏡のついたソーイングボックスというのを買って、化粧品入れにした。この私があるの気になるなんて、自分でもおかしいけれど、これを亡父に見せてやりたいような気がする。父はいつも「お化粧をしなさい」とうるさく言っていた。私はその度に「素顔の勝負よ」などとほざいていたのだった。

もう素顔は通用しなくなつて、遅まきながら、クリームを塗りこんでいるが、この

鏡がうぬぼれ鏡でないのが残念である。

○日

K子は大型不用品収集家。まず、お向かいさんが応接セットを出された時に、交渉して椅子二脚をもらい、空き部屋へ入れさせてと言つて来た。実はこれは私ももらうか、と思つた代物であつたけれど、部屋のことを考えて断念したのだつた。次に、会社から卓球台をもらつて来た。まだ充分使える、試合のできる本格的なもので、大きなトラックで運びこんだ。食堂を片付けて、卓球大会をしましょうとのこと。さびの出た植木棚のようなものも、どこからか持つて来て、ピンクのペンキを塗っている。次は何を持ちこむのかな。ピアノがほしいから、私も一緒に探し歩こうかしら。

○日

ボイラー故障。一時間焚いて、お湯を出したつもりが、水が出てきて初めて気がついたので、寮生に知らせるのが遅れてしまった。寮生は、一寮へもらいに行くのと、銭湯へ行くのと、もういい、のに別れる。

銭湯組が一時間経つても帰らない。夜道でもしや、と心配していたら、ようやくM

子達が帰り「駅前のお風呂屋さんには、スチームバスや泡のやらがあって面白かった、また行きたい、病みついた」とのこと。

四月

○日

B子とY子が夜、縄跳びをしている。私は出て行って冷やかす。「この前のジョギングは、三日坊主どころか一日坊主やったねエ」B子は「絶対に、三日坊主にしないから、おばさん見ていてね」と言った。

翌日も跳んでいて、私を見て二本、指を立てた。Vサインかと思っていたら、次の日は三本の指。三日続いたよ、ということである。しかし、その次の夜は雨が降っていたので四本の指は見られず、その次は晴れていたが姿は見えなかった。

そのうち、私も参加しようと思っていたんだから、早く再開してちょうだいよ。

○日

急に春めいた日曜日。K子とM子の部屋をのぞいたら二人ともマンガを読んでい

た。私は「いい若いモンが二人して、寮の狭い部屋で寝転んで、マンガを読んでいるなんて、どんなもんなあ」と言つてやった。

M子は「私は出かけました。ローソンまで」と。ローソンだなんて、ついそこではないか。「五月山は桜が咲いているかも知れないよ。ハイキングして、陽に当たつていらつしやいよ」

しばらくして二人で下りて来たが「お風呂へ行つて来ます」「お風呂もいいだろうけどねえ……」

考えてみれば、外へ出たがつているのは私だけで、毎日通勤している彼女達は、いくら外が気持ちのいい日であっても、休みの日はごろつと寝転んでいたいのかも知れない。それにしても、ボーイフレンドぐらい、いないのですかねえ。

○日

今年に入つて四回目の休み。お昼まで寝ていようと思つたのに、寮生のかけるレコードで目が覚めてしまった。大音響で聴きたかつたらイヤホンを使え、と言つてあるのに。

お昼前から出かけ、布地屋、本屋をのぞき外の空気を吸つた。

体の疲れはとれていないが、気持ちの疲れはとれて、不思議なことに、さあ働こう、という気になつてくる。いつもは、働かねばならない、というのだけれど。やはり働きづめ、というのは精神に悪いのだ。もう少し休みがあるといいのにと、喉元過ぎれば欲が出てくるが、今年は去年より三日増えて十七回休める。二十日に一回の勘定。大切にしなくては。

五月

○日

最近の朝の調理場はにぎやかだ。何も食べずに行く子もいるけれど、夕食よりもたっぷり食べて行く子が、かなりいる。パンも厚切りを二枚というのもあって、やはり若いのか。

レタスを敷いて、シーチキンやコーンを山とのせ、ミルクやヨーグルト、ジュースなど、驚くほどの食欲で平らげる。

お昼用のお弁当を作るのがはやっていて、これがまた品数の多いデラックス版で、私はただただ感心して見ているばかり。下ごしらえをするのも遠慮することにした。じやまになるというより、たじたじしてしまう感じがして、である。

梅田店に勤めているS子とY子は、お弁当を阪急か阪神百貨店の屋上で食べるのだそう。地下で仕事をしている彼女達には、空が見えることが、もう一つのごちそう

として加わる。

○日

池田駅前商店街でいい布を見つけた。店の中に他にもありそうなので入ったら、店の主人がいろいろ出してくれて、これはどうですかとすすめる。黒地にプリントのものがよかったので買ったので買った。「これはいいですよ。ピンクハウスの柄です」とつけ加えた。

寮に帰り、通りかかったS子をつかまえて「ピンクハウスで何？」と聞いたら「ブティックの名前で、ブランド名です」という返事であった。女の子好みのものであるらしい。

ワンピースに仕立ててからS子に見せたら「ピンクハウスそのもの」と言う。N子は「ディスコで踊る時に着るのにぴったり」などと言って、やはり五十過ぎのおばはんの柄ではなさそうである。

でもあの店の人がすすめたのだから。変だと思えばすすめないだろう、とあの人を味方にして、休みの日に着て出かけた。着てみたらそう抵抗はなかった。それにピンクハウスであろうと、派手なものでであろうと、私は気に入ったものは着る主義。

しかしN子に、貸してほしい、と言われてしまった。

○日

寮会で、一人ずつ何か言うことになった。H子が、みなさんからの質問にお答えします、と言ったが、誰も発言せず白けたので、私が、モットウにしていることは何ですか、と聞いた。そうしたらすかさず「寮則を守ることです」という答が返って来た。全員が大爆笑。

H子は先日深夜帰りをやったところだし、いつも長電話、そのためお風呂に入るのも遅れる。最近二回続けて自転車でご出勤遊ばした。寝過ごして、駅までの時間を自転車で短縮するというわけ。自転車は休みの子の買い物用で、その日は乗りたい子が沢山いて迷惑したのだ。欠食のサインをしておきながら忘れて、遅番の子が帰った時になくて、H子が食べたことが判る。

H子はまた、電車の中に忘れ物をする名人。「慣れてますから」とケロツとして、忘れ物案内所に電話している。「何回やったの？ 私が知ってるだけでも三回だけ」と言う、「三回です」この前はバッグを忘れた。「バッグをどうしたら忘れられるの」とあきれたら「網棚に置いたから」とこれまたケロリ。

樽ではメガネも電車の中でなくしたとか。かけているメガネをどうして……。不思議な人。

タイル貼りをした。床用のPタイル、三十×三十センチのを二十枚。古くなったせいか、廊下のあちこちが浮き上がっていた。会社からの修繕を待つよりは、と物置に入りこんで、予備のタイルと糊を探し出した。

大きいパレットナイフみたいなもので、糊をのばし、タイルを置くだけだけれど、サイズがほんの少し違って継ぎ目が浮き上がる。それを無理やり押しこんで、体重にものをいわせて押さえ、あとは消火器を重石にした。

点々と、または線に、新しいタイルの部分が目立っていて、これは私がした、と満足する。

十三日

夜十時半頃、寮長が「寮母さん、ちよつと食堂まで来てください」と言ってきた。時々、料理の味見に呼び出されることがあるので、それかと思つて行つてみたら、全員集まっていた、せーのと声を合わせて「大阪のお母さん、母の日おめでとう……。」「と言いだした。私はもう驚いてうろたえて、あとの言葉はよく聞こえなかった。カー

ネーシヨンの大きな花束をもらい、ありがとうを言うのがやつとであった。

寮生達、いつもは言うことを聞かないでおきながら、しゃれたことをするではないか。普段の食堂の出入りはバタバタと派手に音を立てて、誰が通ったか判るほどのに、今夜は静かであった。私に気づかれないよう、足音を忍ばせて集まったらしい。

部屋に帰り、ポリバケツに生けて眺める。赤い、二十本のカーネーションは、一人の顔のように見えた。

○日

R子が友人の結婚式に出かけた。ピンクのパーティドレスの上に白のジャケットをおおって、華やかで美しい。

この頃の若者は、暗い色のものばかり身に着けて、目を楽しませることが少ないけれど、だからこういう時は、さながら蛹が蝶にかえたような感じとなる。

女の子はいいなあ、と私はしばらく見惚れていた。

○日

R子にもらった引き出物の鯛で、鯛めしを炊く。

鯛を取り出して、身をほぐしてご飯の上へ戻していたらN子が「犬のご飯作ってるみたい」と言う。「いやなこと言うな。食べさしたらへんよ」

「鯛めしほしい人にはあげます」と言ったら、みんな取りに来て、N子も来て「おいしそう」とお愛想を言った。

○日

伝言板が届く。全員へのお知らせや個人への電話の取り次ぎなどは黒板に書くようになっていたが、めいめいのその日の勤務時間、在・不在が判るようなものがほしいと、三月の中頃、I子がK氏に言ったのだった。

しかし以後音沙汰なしで、ついこの間I子と二人で「あれはきいてもらわれへんらしいね、寮費が余ってるから買おうか」と言っていたら、それが聞こえたかして、K氏が持つて来て下さった。

白いボードに磁石のついたボタンを、在寮、外出のところひつつける。遅番、クラブで遅くなります、とか書けば、一々出がけや電話で言わなくてもいいわけだ。I子が門限破りと外泊の数も書き入れようと言いついで、その欄も作り、正の字を入れる。これはかなりのブレイキになりそうな気がする。

しかし、ボタンを移し替えるのを忘れるのが多い。誰も忘れなかったのは初日だけ。あとは見事に交替で忘れる。でも私は楽になった。電話がかかった時、三階まで見に行かなくてもすむし、夜、誰が帰ってないか、サイン帳を確かめなくても一目で判る。

○日

衣替えの季節。急に暑くなったこともあって、みんな軽い服装となりすつきりとす。寮内で履くスリッパも新調が多くなった。電話の取り次ぎで、入浴中の寮生はスリッパを見るのだけれど、変った当座は誰か判らない。しかし、スリッパにも性格や好みが出て、色柄を見ればなるほど、と思えて、覚えるのにそう苦労しなくてもよい。

六月

○日

一月くらい前に総務のMさんから「みんなで琵琶湖へ行くのですが参加されますか」と電話がかかった。

ミシガン号に乗るのだと聞いて、私は即、行きますと答えた。二年程前、ショーボート・ミシガンが就航した時から乗りたかったのだ。

しかし、「あとで詳しいことは知らせます」とのことだったので、何も言つて来ない。寮生には、その日休むと言つてあるし、しびれを切らして尋ねた。

返事は「あれを武田さんに知らせたのは間違いでした」であった。旅行用の積立金がないからという理由である。お金はちゃんと払いますから連れてちようだい、と言いたかったけれど、言えない雰囲気電話は切れた。

休みを戻し、黒板に「お風呂、食事あります 欠食のサインをしてください」と書

いた。

○日

雑草の季節。ちゃんと言うと、草取りをしなくては、と気になる季節。

昨年は業者に頼んだから、らくちんだったけれど、今年はまだ来ない。K氏に言っているが、なんか来ないような気がする。草を取ったあと、薬剤をまいたけれど、今年は別の草が生えている。一時は一面カラスの豌豆であった。それが終わればまた別のやつ。これも昨年はなかった。雑草学の権威に聞けば「そういうもん」で、手で取るのが一番とのこと。

しかし多過ぎて手に負えない。道に面した所を取ってまわるのが精一杯で、最後の所へ行き着いたと思ったら、はじめの所はもう生えている。

よく生えるなあ、イヤミを含んで思っているのだけれど、その昔、鳥の餌と、宿題の干し草作りのために草を探し回ったことを懐かしく思い出した。今ならそんなノルマもイチコロだ。

○日

寮長のI子が来月退社と決まった。I子は明るくて、よく気がつくし、頼もしい私の片腕だったのに。

「ここについても結婚相手は見つかりそうにないので九州に帰ります」と言う。結婚なんか、と言いたいけれど、若い娘に言えることではない。

昨年私がここに引っ越して来た日に、I子は一人寮にいた。熱を出して、パジャマにガウンの姿で氷枕をぶら下げて歩いていた。そのあと彼女はすぐスキーに出かけ、午後早く帰って来たが、私がチャイムのスイツチを戻すのを忘れたために、しばらく締め出していたことがあった。それで一番に名前を覚えたのだった。

もつといてよ、とも言えないし、ようやく私は「手紙書くわ」と言った。

ボイラー室で例のやかましい金属音が鳴り出した。一回十分程だけけど夜中でも鳴る。近所からの文句の出ないのが不思議な程である。密接はしていないけれど届かぬはずはない。もちろん私も胃にくる。

今日は鳴り出した時、ボイラー室の戸を開け、玄関の戸も開けて、ロビーから電気部に電話をかけた。

「二寮です」

「なんやえらい音がしてますなあ」

「あれを止めてください」

「すぐ手配します」

大成功。今まで電気部の人 came 時に、やかましい音がすると云つても、その時鳴つていなければ調べてもらえなかつた。早くこの手に気がつくべきであつた。説明を百回するより音一つである。

すぐに近くの修理屋が来て、音は消えた。

○日

最近、ボタンキュウといかなくなつた。疲れ過ぎと年のせいとその他もろもろ。

ふと、昔母が入院して眠れないと言つた時に、玉葱を持って行つたことを思い出した。枕許に置いておくと眠れるとのこと、実際それはよく効いて、同室のおばあさんにもあげて喜ばれた。

それで私もやってみることにした。玉葱がどう作用するのだろうかと疑いながら、母を懐かしがっているうちに眠つてしまった。玉葱が効いたのかどうか判らない。

○日

F子は雨女。彼女が休みの日はほんとによく雨が降る。たまに晴れようもんなら「おばさん、今日はよいお天気ですウ」とニコニコ言いに来て、可哀相なほどである。

という私も最近雨につかれていて、休みというと、昨日までカンカン照りだったのに今日は朝から降っている、という具合。雨も降らなくちゃならないだろうけれど、何も私のひと月ぶりの休みだというのに降らんでもいいでしょと恨めしい。

未練たらしく、十円はりこんで電話で気象ニュースを聞いた。

「どういうわけか、突然、空から雨雲が消えました」なんてことはない。

七月

○日

オリンピックが近づいて、元オリンピック水泳選手のC子は特に忙しい。企画の水着の部に属しているから、寒い頃から今度のオリンピック用の水着のことで、何度も東京まで往復していた。私も早くに数着の水着を見せてもらった。それらを彼女が着て泳いで試し、デザインの良否も加味されて、競技用、飛込用が決まるとのことであった。

先日C子がやって来て「おばさんがいいねと言わはったのに決まりました」と言った。私も見る目はあるらしい。

日本選手が日の丸を揚げたら、M社はその水着を、大々的に売り出す予定、だそうである。

○日

このところ寮内、テレビのナイター観戦でかまびすしい。巨人と阪神が好んで(?) Bクラス入りを争っているものだから両ファンも力が入る。

鹿児島、島根出身は全員巨人ファン。兵庫、和歌山あたりは阪神ファン。食堂のテレビで両方一緒に見ていれば、同じ場面で「チャンスー」「ピンチ！」の声が入り交いややこしい。

大負けしている方のファンが「チャンネル回していい？」と言えば、勝っている方は「なんでえ、回したらあかん」しかし、こっちの戦いは単なる力関係で片が付く。新ちゃんが譲る。でも見えにくいけれど各室にテレビがあるから、見に帰ればよいので恨みは残らない。

○日

裏の家が、古い日本家屋を壊し、ビルを建ててらしい。晴雨にかかわらず朝早くからシヨベルカーが動き出す。勤務の関係で十時まで寝る子も、寝てられへん、と起きしてしまう。しかし、出かける寮生達はまだいい。私は一日中その音を聞いているわけで、頭の中までえぐられそうになる。ラジオの音を大きくしても役に立たない。

気分転換にと自転車に乗って出かけたなら、見事にひっくり返ってしまった。平坦な道だったのに、理由は判らない。変になった頭でいくら考えても判るはずはないけれど。

○日

今年入ったP子が、同室のT子のいびきが大きくて眠れない、と訴えて来た。よく聞けば入寮以来ずっとだったとのこと。T子は鼻が悪いと言っていて、いびきをかきそうだけれど、去年は同室予定の子が入寮せず、ずっと一人暮らしをしていたから、この種の悩みを聞く機会がなかったのだ。

私は、何で早く言わなかったのよ、と言ったものの、どうすればよいか困ってしまった。T子に言ったところですぐいびきが止まるわけなし、その後の二人の仲がますますなっても困るし。考えた挙句、P子を別の部屋に寝かせることにした。

全員に、暑くなってきたから、夜寝る時だけ空き部屋を使ってよろしい、と言って回り、P子にはT子の前で私に、行ってもいいんですか、と言わせた。

一時しのぎではあるがひとまず解決。寒くなるまでにT子に治療を勧めるか何とかしなくてはと頭が痛い。

○日

I子が退寮した。彼女は会社を辞めてから三日間、昼間は荷作りをし、夜は送別会に出かける。そして十一時を過ぎて帰っては、お風呂場を洗う。

「もう免除してあげる」と言っても「いいえ、規則ですから」ときかなかつた。「罰掃除の記録保持者と違うかなあ」と言えば「そうかも知れませんが」と笑っていた。罰掃除をためたままゆうゆうと退寮した子もあるし、いろいろだ。

二日間お昼とお茶の時間を共に過ごし、ついでに、「結婚相手は外面にとらわれず人間性を見よ」と偉そうに説教をしたが、果たして彼女の将来はどうなるか。私と気があっているくらいだから心配なのだ。

別れが近づいてきたら「もう、うろろうしてー、目ざわりでいかなから、はよ消えてしまつてよ」と冗談でごまかし、さよならの時は「後ろ姿を見送るのはいややからここで終りにするわ」と門のドアをボタンと音をたてて閉めた。

○日

大阪梅雨明けの日、Rさんとフェスティバルホールへ行った。コーラス仲間が出演

する大フィル演奏会。例の如く天井桟敷で聴いた。

はねた後、友人がカラオケバーに連れてやると言う。「えー、折角いい音楽聴いたのに」「雰囲気こわれるわ」

しかしRさんも私もカラオケなるものは初めてだから好奇心につられてついて行った。元コーラス団員といいながら、歌えない、歌謡曲を知らない私には、〃騒音のるつぽ〃でしかなかったが、人々のカラオケに熱中するわけはよく判った。ストレス解消にはうってつけのものだろう。お酒が飲めて、歌えたらどんなにいいか、ここだけでもはや二つの楽しみを持つていない私は残念で仕方がない。

途中で抜け出して十二時前に帰り、マニキュアを落とすし、寮母に戻る。

八月

○日

蟬捕りの子供達が行く。それぞれ長い柄の網を持ち、カゴをぶら下げて。

今日は酒屋のおじさんも仲間入り。昔とった杵柄か、返す刀ならぬ網で二匹捕つて、集団の中の一番小さい子の一番収穫の少ないカゴの中に入れてやり、お酒を積んだオートバイで走り去つた。その後ろ姿に向かつて、子供達の「ありがとう」の大合唱。カゴの蟬も鳴いた。（ありがとうとは言つてない、か）

私が通りかかると、飛んだ蟬を追つた網が回るのが一緒になり、私は自転車ごとひっくり返りそうになった。「すみません、ごめんなさい」謝つた男の子が可愛かつたので、私はニッコリして「がんばりね」と言つてやつた。

（いいのよ、私を蟬と間違えたのでなければ。捕えられて、この上またカゴの中に入れられるのでなければ、よ）

○日

健康診断を受けに、大阪市東区横堀の結核予防会へ行く。人事部から、近くの病院で受けてください、と言って来たが、午前中の外出はできにくいし、行ったとしても各科を回れば時間がかかりそうなので、寮生達の間割りこんだ。

所要時間は二時間。検査料はタダ。＼お達し＼に逆らったけれどカマウモンカ。診断書が人事部に届けばいいのだし、私一人紛れこんだところでどうということはないだろう。

電車に乗れて、御堂筋を少し歩いて、精神的治療にもなった。贅沢を言えば、身長が二ミリ減っていてガツクリし、視力は両方とも一・五でまだその先も見えそうであったこと。看護婦さんがコンタクトレンズ入れてませんね、と確かめた。遠くがよく見える分、近くがさっぱり見えないのだ。

○日

寮生達のお行儀の悪さに堪忍袋の緒が切れそう。寮会で「言いたくないのだけど」と立ち上がったら、K子が「わあ、お婆さんの久しぶりの文句！」と言った。うれし

そんな顔をして言うものだから氣勢がそがれるではないか。

それでも私は「もうちよつと何事もきちんとやれませんか。ここは養護施設じゃないのだから」と言った。しかし、もつと、目はあるの、神経はどうなってるの、頭は？
体が不自由なのか、と言ってやろうと思っていたが言わずに終る。この前は「あなたはお嬢様育ちやからねえ」と皮肉作戦に出たが効き目がないので、今度は侮辱作戦でいこうと思ったのに。

体が不自由どころか、敵はさるもの、自分達のやっていることは分かっている、私が文句を言うのも分かっている、かく乱戦法を考えたか。私の負け戦であった。

○日

C子の深夜帰りが続く。昨日は十二時半、この前は二時に近かった。会議の後、飲み食いしていたからと。

昨夜は送って来る人に、一言文句を言おう、と待ち構えていたのだけれど、門の所までは来なかった。この前は送って来たものの「時間を間違えまして」という言い訳であった。間違ったとはどういうことか。「あんまり楽しかったので時を忘れました」というのならまだ許せる。第一、寮や寮母を何だと思っているのか。C子も自宅なら

二時には帰らないだろう。寮母はチャイムを鳴らせば門を開けるロボットじゃないのよ。私はC子が急病にでもなったのか、そこまで帰ったものの、痴漢に遭ったのではないか、消息を知ってだてはないかと落ち着かないのだ。それに翌朝は他の寮生のために早く起きなければならず、C子にだけつきあっているわけにはいかないのだから。

ゆうべC子には「お嬢さんの帰る時刻ではありませんよ」とだけ言い、今日会社へ電話をした。直接C子の部へ、寮生を早く帰して、と言いたかったけれど、K氏を通すことにした。K氏は「そういうことはすぐ言ってください、嚴重注意します」と言われたが、私は何か後味が悪い。規則を大破りしないでちょうだい。こんな気分はもう沢山よ。

○日

今年も勤労青少年指導者大学講座生が一人入寮した。企業研修としてM社で約一月働いたためである。

歓迎の寮会をした時、H子が「あなたの名前が池田早月（さつき）さんと聞いて、ここは池田市で、近くに五月山（さつきやま）があるから、てつきりシャレだと思っただ」と笑わせた。

国立大の在籍中にアメリカ留学をしたという彼女は、好奇心のかたまりという感じで、M社の研修の合間に京阪神を探訪する、と張り切っている。そして大阪弁をものにしたいから教えてほしいとのこと。しかし、ここは九州、四国、山陰、瀬戸内出身者ばかりで、大阪人はいない。彼女が帰る時、どんな大阪弁が仕込まれているだろう。

九月

○日

今までに見たこともない黒雲が出て、にわかになつたような空から、どしや降りの雨が落ち、間もなくあつさり止んだとたんに、冷たい風が吹き出した。三十三度あつた室内の温度が二十八度に下がる。まさに天からの贈り物という気がする。

けれども、気温が連日三十五度を超えても、あのやかましいほどの蝉の声はなくなり、わずかにツクツクボウシの声が残るだけ、夜は秋の虫が鳴いている。人間の体感より、昆虫の方が季節を先取りするらしい。入つて来たしじみ蝶が出てやる間もなく横たわり、息絶えた。さしもの雑草も勢いがなくなつた。

縫い物をしていて、急に木綿の軽さが空しくなり、ウールの感触が懐かしくなる。秋の風に似合う服を作りたい。

○日

大失敗の巻。ロールキャベツを炊きながら、換気扇の掃除をしていたら煙の匂い。もう走るまでもない、だめに決まっている。

時間があまりない。とにかくダイエーへ行く。いつか、冷凍のロールキャベツを見たことがあるから。でもそれらしきものは見当たらない。メニューを変えて、寮生に謝ろう。けれど何にしようかすぐにできるもの。

それも思いつかず、通りかかった店員に聞いてみた。

「こんなのしかありませんが」と指さしたのが、まさしくお目当ての冷凍ロールキャベツ。こんなのしかって、これがほしかつたんですよ。ウロがきてて、目の前にあったのに見えなかったのだ。

とんで帰り、炊き直して、危うくセーフ。

この失敗は二回目である。(ナンテえらそうに言えることではないが)この前は豆を焦がした。その時は朝から始めたので、慌てることなく豆を買い、ゆっくりつけて、ゆっくり炊いてすましていられた。

煮物をしている時は、他のことをしない、そばを離れない、が鉄則。

○日

A子の食べる分が無い。二回連続である。A子がふくれて部屋へ入ってしまった、と一緒に帰ったE子が言いに来た。

この前はT子が、外泊するから食事は処分して、と電話を受けたC子に言ったので、C子が処分した。でもT子の分は、はじめから無かったのだ。その時はA子が、ラーメンがあるからいい、と言い、A子とT子の欠食を入れ替えて解決した。しかし、A子の気持ちはすんでいなかったのだろう。それも無理はない。遅番で疲れて帰り、さあ食べよう、と思つたら無いのだから。

今日はN子が間違つて食べたのが判る。あれほど自分の分はあるのか確かめて食べなさいと言つてあるのに。

幸い、ご飯は余っていたので、卵を焼きサラダを作つてA子を呼んだ。他にいろいろ有り合わせを出したので、E子達は「いいなあ、おばさんの特別食が食べられて」と言い、A子はようやくニッコリとした。

○日

このところ、町の不良どもとの戦いに明け暮れている。彼らはここの空き家になつ

ている旧館に入りこんで、生活(?)をしようとやって来るのだ。

はじめは庭に入りこむだけだと思っていたから、入らないでね、とやさしく追い出した。彼らも、すみません、とおとなしかったのに、次の日堀をよじ登っているところを見つけて怒鳴ったら、とたんに反抗的になり、悪態をついた。明らかに未成年の男女四人。

しかし、帰ったと思ったのが、また有刺鉄線を乗り越えて旧館の中に入ったらしい。私はもうあの恐ろしいな若者達に立ち向かう元氣はなくて警察を呼んだ。れっきとした不法侵入だもの。

でも警察がやって来る前に、彼らは気配を察して立ち去った。警官もなんですぐ来てくれないのだろう。それにようやくやって来た警官は、出て行ったのならもういいだろう、という態度であった。

閉鎖してあるはずの旧館を見に行くと、二階の雨戸をはずし、ガラスを割って入ったことが判った。ちょうど来ていた電気部の技師に、雨戸を全部釘で打ち付けてもらう。しかしこれでも破ろうと思えば簡単だろう。

彼らはその次の日も夜中にやって来た。しかし打ち付けてあるのは知らなかったらしい。あきらめて帰ったが、どうもまた壊しにやって来るような気がする。それがで

きなければ、腹いせに火をつけるかも知れない。やりかねない、と思える者達だ。気になつて眠れなくなつた。

追つても追つてもたかる蠅のような感じがある。叩きたい。強力な蠅叩きがほしい。

○日

蠅叩きを求めるより、たかるものをなくした方が早いのではないか。廃屋になりかけの旧館を取り除けばいいのだけれど、会社は経費の問題でしぶつている。

けれども、この度は、不良少年達の通路となつて朽ちかけた非常階段だけでも壊してほしい、と私はK氏に頼んだ。社内の工事が済み次第、という返事にも、明日のうちには是非、とがんばつた。別の用事で電話をかけて来た電気部の人にも頼んだ。強引過ぎる、と思われても、私も寮生を預かつているのだし、何かが起こつたら、あの時に……と後悔するよりはましだろう。

今日は朝から雨の中を大きなハンマーを持った人が、壊しに来てくれた。ハンマーの破壊音が一つ鳴る度に、私の神経も一つ伸びて、私はようやくやく安心する。

K氏に、現在進行中、の電話をかけた。

十月

○日

鳥取と淡路島からの受験生が一泊した。同じ出身校のE子達が、受験の要領を教えたり、雑談をして、気をほぐしてやっていた。私は久しぶりに朝ご飯の支度をする。二人とも、かなりの食欲をみせて、ゆうべもぐっすり眠った、と言っていた。こちらの思うほど緊張の固まりではないらしい。

彼女達を「がんばってね。合格して、来年またこの寮へ帰っていらっしやいね」と送り出した。

○日

F子のはたちになった。同期生で祝杯をあげているから遅くなる、と連絡があつた。二年目の子のグループは、人数が一番多くて元気がある。さぞかしにぎやかにやって

いるのだろう。しかし、祝杯などと言っているが、中には未成年もいるはず。そしてジュースで乾杯をしているはずもない。いいのかなあ。

この中のF子が一番激しく殻を脱いだ。島根から出て来た時は、方言はそのまま、何事にも慣れなくてうろろしていたが、難波の直営店に勤めて一年半経った今、すっかり都会っ子になった。特に、着る物のコーディネートがすばらしい。色彩感覚も抜群で、私はただ感心して見ているだけ。

同じ経過をたどりながら、一向に変らないという子もいるから、これは持つて生まれたものだと思われる。隠れていたものが芽を出し、めきめき成長するのを見るのは、興味深く楽しいものだ。

でも、親にすれば、帰郷する度に美しく変って行く娘を見て、果たしてうれしいだけだろうか。心配もあるだろうなあ、と私は老婆心を出してしまう。

○日

各部屋のドアの把手に、いろいろな当番の札がぶら下がっている。当番が済めば次の部屋に回す。

「寮当番」これだけ一枚で、私が休んだ日に鍵を持ち、その他寮母の代わりをする。

他の札は各階一枚ずつ。

「冷蔵庫掃除」十日毎に中の物を全部出して拭き、霜取りをする。食品には持ち主の名前と買った日が書いてあるから、日付を見て、古くなったものは、当番の判断で捨ててもよいことになっている。

「屋上掃除」「トイレ掃除」は日曜日。

「掃除当番」は毎日。廊下を掃いて拭いて、窓などの点検、各部屋をのぞいて「戸締まりお願いします。おやすみなさい」と言って回り、私の所に「○階掃除点検終了しました」と言いに来る。

これらの札には楽しいイラストが描いてあり、リボンも色々だ。当番の間隔が異なるから、一部屋に四枚も重なってぶら下がることもあるが、どうやらどの当番も二人が交替でしているらしいので、重なってもうまくこなしているようだ。

その他各人の好みでドアにぎやかに何かが引っ付いてある。「○子と○子の部屋」「就寝中」「ノックしてね」中には「勉強中」というのもあり、ほんまかいな、と思うけれど、だから入るなということだろうから、確かめたことはない。

○日

石橋はお菓子屋さんの多い町。地元の和菓子屋さんもいくつかあり、洋菓子の有名店はほとんど揃っているらしい。寮生は、お菓子の種類によつて何はどこのがよい、とか言っているが、私には関係がないので気を入れて聞いたことがない。「不二家の隣の花屋さん」と言われても、雲をつかむよう。

手紙を出して、と頼んだらO子が「お婆さんはここから一番近いポストはどこか知ってますか」と聞いた。私は「手紙だけでようやく世間とつながつてこの私に、今になつて何を言ってくれるのよ。私は石橋、池田の郵便局とポストとは、お友達のようなものよ」と言つたけれど、ほんとに自転車で走つていても、ポストはすぐに気がつく。寮生は郵便をあんまり出さないらしくて、O子もポストの場所をようやく知つたらしい。

私のお菓子屋と同じように、通つていても目に入らないのかも知れない。各科の病院をよく知っているのはU子。それぞれで面白い。

私は、ポストと布地屋と手芸材料店とたばこ屋の位置がわかる。

○日

電気部のM氏が修理に来て下手なことをして、私が見ていたものだから「これじゃ

寮母さんを笑えませんなあ」と苦笑している。へえ、私を笑い者にしているの、けしからんわ。あ、しかし無理もない。私が大工仕事や自動車の整備をするなんて、この人には決して信じてもらえないだろう。私の手に負えないと思い「早く修理に来て」と電話をかけて、ようやく来てもらったら、いつもあつと言う間に直るんだから。

マイクが使えなかったのは、差しこみがゆるかっただけ。時計が動かなかったのは、入れ替えた電池がちゃんと入っていないかった。よくこわれる洗濯機だから、寮生の、動かない、と言うのを聞いて、見に行かずに、また、と思いこんだ。実はコードがソケットからはずれていたからであった。

お風呂の明かりが消えた時、電球のカバーが動かなかったので来てもらったら、彼の手がかかるなり、易々と動いた。「私がしてみた時は固かったのに」「反対に回しておられたのと違いますか」「まさか」

でも彼は、私ならやりかねないと思っているに違いない。仕方ない。どういうわけかこうなるのだ。

「いいのですよ。電球一個であろうと、とんで来ますから」「ほんとにすみませんでした。なるべくご足労をおかけしないようにがんばります」彼は疑わしい目で笑っている。私はそれ以上は言えない。オホホと笑っておいた。

○日

カラヤン指揮、ベルリン・フィルの演奏会の日。

切符は四月の終りに、早朝から四時間余り並んで手に入れたが、大きな期待と共に、私の足とふところの痛さはカラヤン氏に判るかしら、と少々恨めしかった。あれから百七十三日。

私は熱烈なカラヤンのファンではなかったけれど、ふだんラジオを聞き流しているも惹きつけられ、一生懸命聴いてしまうのは、決まってカラヤンとベルリン・フィルの演奏であった。世界で指折りの、というのは私にも判るらしい。その彼らが来て、聴きに行けるのなら、やはりこれは少々無理をしても行かざるまい。殊に多分これが最後になるだろうカラヤン氏は、一目見ておきたかった。しかし、春が過ぎ夏を越して十月というのは遠かった。しかもその間、両者の不仲説はなかなか覆らず、ようやく十月に入ってから、予定は実施される見込みというニュースを外電が伝えたが、カラヤン氏の病気で中止になるかも知れないという不安は残っていた。

それでも何事もなく、喜んでホールに入ったら、演奏曲目が変更されます、とのことで、私が特に聴きたかった曲が抜けていてがっくり。なんで、と喉元過ぎれば欲が

出て来る。

カラヤン氏は、思ったより以上に体の具合は良くないようであった。しかし彼の振るタクトから、ベルリン・フィルの変りない、美しく力強い音が引き出され、私達を夢心地にさせた。今ここにカラヤンがいて、ベルリン・フィルが勢揃いしている。私にはもひとつ夢のよう、としか言いようがなかった。

音楽が流れ、時が流れて、あつけないくらいの感じで終章となった。静かに胸の中にためていた聴衆の興奮が爆発する。体の悪いカラヤン氏を何度も呼び返すのは気の毒な気もするが、拍手は鳴り止まず。彼もドアまでの距離をはしより、途中から戻ったりして私達の拍手を受けた。

ベルリン・フィルの人達が引きあげて、ホール内が明るくなっても帰る気になれなくてぐずぐずしていた聴衆がようやく帰りかけた時、突然ドアが開いてカラヤン氏が現れた。譜面を片付ける人がいるだけの空っぽのステージに彼が出て来ようとは、一つも考えなかったのに。聴衆は総立ち。帰りかけた人も戻り、歓声と拍手が渦巻いた。彼もそれに応え、キスを投げる。二度とここへやって来ることがないのを、彼は知っているのだろう。彼の方が私達との別れを惜しんでいるように見えた。私は涙が出そうになった。かつての帝王ではない、好々爺のカラヤンがそこにいたからだ。体を大

事にしてまた来てね、と言いたくなるほどであった。

三度目の最後のドアは、彼自身がノブを掴んで閉め、去り難い聴衆の微笑を誘う。体は衰えても、最後まで彼は、ヘルベルト・フォン・カラヤンであった。

十一月

○日

今日は栗ご飯である。去年みんなで栗の皮をむき大騒ぎをした、あれからも一年も経つのかと感無量である。今年もまたみんなに手伝ってもらったが、もう一緒にするのは止めにした。危なっかしい手つきを見ているのは神経に悪いからだ。その代わり、これでむいたと言えるのかというのが一杯ある。結局大半は手を加える。一つずつ見てみると、一刀彫りかと思わせる芸術的なものや、何やら字や形を刻みこんだようなものや、渋皮をこうも良い按配に点々と残したものと感心せざるを得ないものや、でもどれも苦心のあとがありありで、ほほえましかった。

去年、私が「たのむからもうやめて」と言ったM子はどうしたのだろうと思っていたら「おばさん、私ちゃんと六個むきました」と言いに来た。私は思わず「怪我してない？」と聞いた。M子は手を広げてひらひらさせて笑っている。「ごくろうさま、

お手並み拝見に行きたかったなあ、残念なことをしたわ」と言ったが、どんな手つきだったか、まだ見ない方がいいだろう。

○日

かつて長電話の横綱と大関だった二人が、それぞれ長電話の相手と結婚して出て行ったので、しばらく電話機の前は空いていたが、よくしたもので（よくないけど）すぐ昇格するのが現れる。他の人もかけたいのだし、外からもかかって来るのだから、一人占めにはいけないと言つてあるのに、一度とりついたらなかなか離れない。連夜三台の電話がふさがりっぱなしである。

黒板に「長電話はやめましょう」と書いた。変りがないのでその下に「ね」と書き加える。変化なし。またその下に「！」と書いた。だめ。次は「ましようね！」を消して「て下さい」と書いた。しかしなんのことはない。毎日私一人が黒板で遊んでいくようなものだ。

他の寮生がはつきりと文句を言わないのは、どうやら、明日は我が身かも知れない、からのようである。ボーイフレンドができたらと勝手に長電話となる。

○日

会社を信じ、庭の手入れをしに来るのを待つて半年。もう来るわけはない。蚊も蜂も姿を消したので草取りにかかる。よくもまあ名もない（といたらテンノウヘイカにおこられるけれど）雑草がはびこるものよ。セイダカアワダチソウ（名前があった！）は三メートル近い。セイダカとはよう言うたと感心する。気をつけたのに、イノコヅチ（！）に引っ付かれた。頭のとっぺんから足まで。もう私自身がイノコヅチになつたような気分である。

一回やつて全体の十分の一か。しばらく雑草のジャングルの戦いが続く。

○日

会社から節電、節水、節ガスをとのお達しがあつた。それぞれムダをしているのは確かである。特に洗濯の時、ゆすぎの水の出しっ放しが多い。ひどいのは洗った水を流さないで、もちろん中身をしぼりもせずにもそのまま水を出してゆすぎにかえる。水がきれいになるまで何十分もかかる。切り替えて部屋に帰り、テレビを見たり、レコードを聴いたりしているから、きれいになつてもすぐ止めるわけでもない。水はモーターで屋上へ上げているのだからムダな電気も使うのだ。どことも同じらしくて、一寮の

寮母さんも怒っていた。一寮は別にブザーが鳴るようにしたそうだ。K氏が二寮もいるのだったら、と言われたが、寮生が部屋に帰っても時計はあるのだし、何分経ったかは大体判るのだから、横着をしなければよいので、気をつけるよう言いますから、と断った。

機械に時を刻んでもらい、音で知らせてもらわなければ動けない、というのは情けないではないか。お尻を叩いて追わなければ動かない田んぼの牛と同じでは困るわ、と思つてから笑つてしまった。古い。今は牛の代わりに機械が耕していたのだつた。しかし笑つている場合ではなく、言つたものの、一々見張つているのではないから、きちんとやつているのかどうか判らない。信用しては裏切られているからやつぱり音で規制しなければならぬのだろうか、とすつきりしない気持ちである。

○日

H子が「今日はみんな遅くなるから、明日のお風呂の休みを今日と代えていただけませんか」と言いに来た。詳しく聞いてみると、C子を除いたあとの人が宴会に出席するとのこと。そう言えば欠食が多く、二人分はできないから全員欠食にした日であつた。

食事なし、お風呂なしでは、おばさん稼業も廃業同然、いつそ職場放棄してやろうかしらん。誰か遊んでくれる人いらないかなあ。

チャンスとばかりに、普段会いたくても会えない人に電話をかけたが、どの人も留守。謀反を起こさずそこにじっとしていなさいということか。いやですよ、こんなチャンスはめったにないのだから。結局、叔母の家に行った。叔母も会っておきたい人の一人である。

叔母の顔を見ていたら欲が出て、C子に電話をかける。「あなたがゆっくりだと私もゆっくりしていけるんだけど」しかし甘かった。C子は「寄る所ないから早く帰ります」とにべもない。C子さん、あなたが夜中の一時二時に帰っても待つてあげてるじゃないの、と言いたかったけれど、いつもは早く帰れと言っているのだし、私はもともと出てはいけなのだから言えはしない。欲は引っこめて早く帰る。

しかしC子の帰寮は門限ぎりぎりであった。他の連中は全員ほろ酔いで十時半を過ぎた。けれども私も規則を破ったから相殺にして罰はなしにする。

十二月

○日

十二月になったとたん、H子がクリスマス・パーティー、O子が忘年会で遅くなりま
す、と言う。「えっもうクリスマス？」とのけぞったら、「クリスマス・パーティーの相
談のための集まりです」とのこと。O子は正真正銘の忘年会だそうだ。

これから一か月の間に、勤め先の、部内の、同期会の、仲良しグループのと何回も
忘年会やクリスマス・パーティーがあるのだから、十二月の声を聞いてすぐ始めなけれ
ば日が足りないのかも知れない。当分入れ替わり立ち替わり深夜帰りが続くのだろう。
私にはそのチャンスはないが、クリスマスには寮内がケーキであふれ、寮母室にも
いくつか持ちこまれる。甘いものは苦手、と言っても無理やり置いて行く。捨てられ
ないからまたRさんに「助けてよ」と言うことになる。

お酒を飲んで忘れられるはずはないけれど、人間たまには頭の神経をマヒさせた方

がいいのではないだろうか。私のように絶えず正気で物を見て考えているのはしんどいなあとと思う。それで正気か、と言われたら、いや、ちょっとは狂の部分もあります。がと言わざるを得ないけれど、それはともかくおいといて、一度気持ちよく酔ってみたい。

しかし私はアルコール分を分解する酵素を持っていない体質とかで、飲めば頭痛がし動悸が激しくなつてひっくり返る、いわば一種の欠陥人間なのであった。甘いものもそうほしくないし、どうなっているのだろう。かなり損をしていることに間違いない。

おまけに宴会に出れば（飲めないくせに宴会は好き）飲めそうな顔をしているのに、と必ず言われる。私も必ず、お酒は顔で飲むのですかとからむのだけれど、できることなら、本当に酔っ払ってからんでみたいものである。

○日

叔母一家が引越すので、いらなくなつた衣類を捨てなくてねと頼んでおき、引越した翌朝早く取りに行つた。多人数の何十年か分で、山程あつた。

親類の家とはいえ、空き家になつた家の、門の門をはずして入るのは変な気をする

ものである。おまけに段ボール箱やふくらんだポリ袋を持ち出すのだから尚のこと。車にさつと積んでさつと引きあげた。

これは、東南アジア救援運動のお手伝いで、前にも寮生の古着をもらって送ったことがある。ここ二、三日はRさんと一緒に点検と仕分け作業をした。通りかかった寮生は必ず言う「何をしておられるのですか」私は「古着屋さんを始めたの」でもいらなくなっても捨てないでねとまじめに頼んでおく。

○日

ボーナスをもらった。封筒にはクラシックに「賞与」と書いてある。もともとは賞与を与えるということなのね。とにかくうれしくいただいた。

明細書に出勤率百パーセントと書いてあった。それを見て私にも百パーセントできることがあったのだと感動する。何事も甘く見て七十パーセントどまり、という自分を知っているから思いがけなかったのだ。最近、体は故障しがちで、百パーセント健康とは言えないけれど、だましながらでも勤められるということは、文字通り有難いことである。

しかし考えてみれば、私は小学校以来学校はほとんど休まなかった。熱があっても、

教室でさぼりはしても、ともかく学校へは行く。親も、怠けるのが好きな子にしては不思議がつっていた。気がつかなかったけれど、何十年経っても変らないものだなと「出勤率百パーセント」を見直した。今年、今までに休んだのは、規休の十四日である。

○日

最近誰かいたずらを楽しんでいるのがある。スピーカーのスイッチをひそかに押しておきよるのだ。

誰かが私に用があつて来てしゃべっていると、それが寮全体に聞こえるというしかけ。しゃべっている私達には聞こえないから、他の誰かが「入ってますよ」と言いに来て初めて判る。それで「え？ 今何話してた？ みんなに聞かれてまずいこと言うてへんかった？」と大恐慌をきたさなければならぬ。

電話の呼び出しに使ったあと戻さないのかと、忘れないように言っていたのだけれど、私が戻したのを確認したのにもかかわらず入っていた時もあるのだから、これはもう、誰かが面白がつてやっているのだとしか思えない。誰かね。ちよつと悪ふざけが過ぎるのじゃない？

○日

庭仕事五回目。今日は外へ出て、石垣のサツキを丸坊主にする。今頃切つて、来年は咲かないかも知れないけれど、再来年は咲くでしよ。

これで溝に落ちた枯れ葉の掃除もし易くなった。こちらのご都合次第で寒そうにしてごめんねサツキさん。

この庭にはクスノキの大木がある。池田市の保存指定樹木となつていて、勝手に切ることはできない。関西電力も電線にかかる枝を切るのに、会社と市役所の許可証を見せに来てからかかり、ものものしい。

庭の草取りがすんだら（あと何回かかるやら、程遠しだけれど）私専用の運動場にしようと思つている。踏んでいれば草も生えにくいだろうし体にも良くて一挙兩得となるかどうか。

○日

夏に九州に帰つたI子が遊びに来て、お土産を置いて帰つた。あでな舞い姿の博多人形である。殺風景な部屋が急になまめいた。

はじめ、置く所もないのにどうするのよと言つていたが、ユニット家具をばらし、

場所を作ったら、かえって便利が良くなり（要するに座ったまま物の出し入れができるようになった）一石二鳥であった。

そこへRさんが鉢植えの花を持ちこんだ。前から持つて来ると言うのを、生き物の世話はいや、と断っていたのに、花が終れば持つて帰るから、と強引に置いて行ったのだ。

しかし、人形があり、花が咲いていると、仲間がいるように感じて、一人でいても淋しくないのである。こんなものとは知らなかった。ぎりぎりのところで生きていればこそ、生活必需品以外の物が絶対に必要なのだと痛感した。ちよっぴり「女の部屋」らしくもなつて、私も不思議に優しい気持ちになる。

○日

久しぶりの休日。カラヤン以来だから五十日ぶりである。奈良へ行つた。雲一つなくて、自由と、自然の美しさと、懐かしさと、おいしい空気を満喫する。

改築なつた東大寺は初めてで、大仏様とも久しぶりのご対面。私は年をとつたのに、大仏様は少しも年をおとりにならない。柱にあいた鼻の穴、昔はすいと通つたけれど今はあやしい。のぞくだけにした。

二月堂、春日大社と、神社仏閣を巡るおのぼりさんコース。スリッパばかり履いている足は柔らかくなっていてマメができた。お土産に売っている杖を本気で買いたかった。春日さんでひいたおみくじは凶。まあこれは足だけのことで、あとは大吉に
終始する。

一月

○日

二回目のお正月。寮生は全員いなかへ帰ってしまった。わずかながらきちんと挨拶して帰る子あり、いつの間にかいなくなるのあり、うれしさの余りか、連絡票にもノートにも日程を書くのを忘れて行ってしまふのあり、いろいろであった。

私は昼間出かけてもよいお許しを得たけれど、夜はいなければならぬ。暗くなつてから誰もいない所に帰るのは怖いから、はじめから出ないか、近い所ということになる。

宝塚方面へ初詣という手もあるけれどその気はないし、行きたい所は遠い。それで半日は音楽聴きながら読書、半日は年を越してしまつた寮内の汚れ落としをすることにする。暮に手を切つたため掃除はしていなかつたのだ。まあ画一的でないこんなお正月を過ごす人があつてもいいんでないの。掃除はラジオの音楽をあちこち拾い聴き

しながら半日ずつやって三日間を消化。

四日は東京からやって来る友達を大阪で迎える約束のところ、京都まで行って、友達に乗っている電車に乗りこみ車内でわつと驚かす。

なんと子供じみたことをうれしそうにやっていることか。おまけに十七分新幹線に乗って、旅行気分だと喜んでいるのだから可愛らしいものである。

寮生は一人、二人と帰り、九日によく全員が揃った。お風呂は四日から、食事は六日からで、その間私はシャワーを使い、食べ物は何を食べたのかしら、Rさん差し入れの、心尽くしのお節の他は何もこしらえなかった。

みんなが晴れ着を着てお正月を過ごしている時に私も、と無理やり仲間入りするよりは、じつとして時の過ぎるのを待っていた方が、かえって取り残された気分がしなくていいことが判った。異分子ははじめから別の器に入っていればよろしい。

○日

大晦日に怪我をした。朝早く一寮の寮母さんが、庭の南天をちようだいと来て、あなた力持ちやから、と鋏を押し付けられたのをむつとしなけりゃよかった。ふくれながらやったから、南天と一緒に手も切ってしまったのだ。

もう寮生は帰ってしまったって、炊事はしなくていいけれど、掃除はまだ残っている。が、やめにした。さぼってもいいですよという神様（私の神様、イエス様ではない）の思し召しと勝手に思うことにする。

しかし左手とはいいいながら普段かなり働いていたのだろう、不自由極まりない。自転車に乗ってもブレーキがかけにくい。かばっていたら腕全体がだるくなる。

けれど良いこともあった。炊事、掃除をしなくなったらとたん手がきれいになった、驚く程である。これが神様のプレゼントか。

でも切った中指を仲間はずれにしているつもりが、切っていない人差し指が間違っ一人立っていたりするくらいだから、もう全快に近い。

○日

いつもきちんと髪をセットしているY子が、去年の秋からすっきりしない髪型をしている。「いつものようなのがいいのに。それともそんな型がはやってるの」と聞いたら「成人式に着物を着るから伸ばしているんです」という答であった。

そう言われてみれば、Y子達二年目のグループは、同じような中途半端の髪をしている。D子は「アップに結えるかどうかぎりぎりのところ。もうちよっと早くから伸

ばしたらよかった、私は伸びるのが遅いから」と毛を引っ張っている。

振袖を自分で買って、毎月お金を払っている子もいるけれど、ほとんどは実家で母親が見立てて用意しているのだろう。娘のいない私は羨ましいような、ほっとするような妙な気分である。

写真を撮ったら私に見せてね、とみんなに頼んだ。女らしく変身した彼女達の姿を見るのが楽しみである。

○日

恩師の宮越先生が亡くなられた。朝早くラジオで聴いた「死者のためのミサ曲」がいつもより悲しく心に残っていたのはなぜかと思っていたら知らせが届いた。

全く西洋音楽に縁のない家庭に育った私を、いまだにどっぶりつかりこむほどのクラシック好きにしたのは、女学校の音楽の先生、宮越先生であったと言える。

甘いバリトンで、くせのある髪の毛をオールバックにした先生はみんなの憧れの的であり、戦時色濃くなって国民服と丸坊主になられた時は泣きたいほどの思いであった。

ある日の歌のテストの時間、二人ずつ歌って最後に一人残ったら、先生は私に一緒

に歌ってあげなさいと言われた。先生としては、はずれては困るけれどあまり上手でもない方がいいと思われたのだけれど、級友達は先生に指名されるくらい上手、と誤解したらしく、その後クラスから何人かのコーラス部員を選出する時に私を選んだ。また私も厚かましくそれに従ったのだ。しかしその我が校のコーラスは優秀で、BKからラジオ放送をしたこともある。宮越先生の指導は独特で、私達は楽しく歌っていた。

ピアノ弾きは各学年上手な人が何人かずついたので、私の学年にはなぜかいなくて、音楽会にまたも私が出たりして、今になればよくも恥ずかしげもなくやっていたなどと思う。とにかく授業の他は音楽室と楽器室に入り浸り、歌ったり弾いたりの数年間であった。

一方、住んでいた所で戦後すぐ市民合唱団ができて、私は年齢制限外だったけれど無理やり入れてもらっていた。初代の先生が辞められた後、来て下さったのが宮越先生である。女専では教授であったし、最近まで市民コーラスのOB会にも出席されて、私と音楽のつながりは、先生とのつながりでもあったのである。

宮越先生の密葬式にRさんで行った。

小さな教会の中、黒い布に覆われ白い十字架のついた棺の中に先生は小さくなって

横たわっておられた。先生愛唱の賛美歌を私達は泣きながら歌った。その歌も先生に教わったのだった。

牧師さんのお話によれば、先生はいつも厳しく自分を見つめられ、死の床で、自分でも神のもとへ行くことができるのだろうかと思ねられたそうである。

最後にOB会でお会いした時、先生は私達に「昔私がみんなに教えた発声法は間違っていた、すまないことをした、悔やんでいる」と言われた。私達は何と比べて違っているのかもさっぱり判らぬ素人である。楽しく歌っていたのだしどうして今頃そんなことを言われるのだろうか、そんなこと後悔されなくてもいいのに、と不可解な気持ちでいたのだけれど、それはその牧師さんの話で氷解した。

私は今まで、神を信じることさえできれば、犯した罪は許されるのだし、楽なものだ、クリスチャンには申しわけないが、逃げこめる安息の場所があつていくくらいに思っていた。しかし救われる代わり、それに価するか、という重いものがあつたのだ。他の人は知らない、少なくとも先生は完璧を求められ、そういう生き方をしてもらったのだ。これはかなりしんどかつたに違いない。これなら、周りに何も存在しなくて、自分自身を中途半端でもなんでも納得せずに背負っている私の方が、楽な生き方をして、と言えるのではないだろうか。信仰の道に私が近づかないのではなくて、近

づけないのであった。

宮越先生は最後の機会に、信仰とは何かを私に解らせて下さったのかも知れない。仕事を放り出し先生にお別れしに行つてよかつた。また教えられて歸つて来た。

先生は今、苦痛を取り除かれ安らかにいられるだろう。長い間ありがとうございました。

○日

恒例のコーラスOB会に出席した。宮越先生を偲んでアベマリア、アベベルムコルプスを歌う。これは二年前に先生がOB会でタクトを振りたいたから楽譜を用意するよう指定された曲である。しかしお体の具合が悪くてそれは実現しなかつた。私達は先生の無念さと私達の心残りを吹き飛ばす勢いで歌った。先生に聞こえたのならいいけれど。

歌っている人達もほとんど白髪混じり、あの元気だったRさんも急病で欠席、手術をした人もいてだんだん淋しくなる。